様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００２４

研究課題名（和文）神・仏観念の生成と展開に関する倫理学的研究

研究課題名（英文）Ethical Study on Genesis and Development of "Kami" and "Buddha"

研究代表者
柏木　寧子（Kashiwagi, Yasuko）

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：００２６３６２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円、（間接経費）　　1,260,000円

研究成果の概要（和文）：日本の倫理思想を根底から捉え返すべく、超越にかかわる二つの基礎範疇である神および仏の観念について、それぞれの生成にさかのぼって考察するとともに、二つの観念の相互関係についても、八幡信仰を一例として考察した。研究の成果は、論文・研究ノートとして公刊したほか、単著の公刊を準備中である。また、『宇佐八幡宮御託宣集』に基づく託宣・示現の年表を作成し、Web上に公開した。

研究成果の概要（英文）：In order to investigate ethical thought in Japan theoretically and fundamentally, we have examined two major transcendental categories, "kami" (Japanese gods) and "Buddha", by focusing on genesis of each conception as well as on correlation of the two conceptions ; we have taken up the case of worship of Hachiman-shin as one example of such correlation. To date, the results of this research have been published in the form of articles and research notes, and book publication is now under preparation. In addition, we have compiled a chronology of oracular messages and apparitions received and perceived during worship of Hachiman-shin, based upon "Collected Oracles of Hachiman Usa-guu", and made it accessible online.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：倫理学　思想史　神・仏　八幡神

１．研究開始当初の背景

(1) 関連する研究動向

神観念と仏観念はいずれも日本倫理思想史の基礎範疇であり、両者は相互にかさなりあいつつ（「習合」）、近世以前の人々に深く根づき、その倫理思想を形作ってきた。日本人の伝統的倫理観をめぐる諸研究において、神信仰も仏法も従来さまざまにとりあげられてきたが、神・仏観念それ自体を、倫理思想史の座標軸をなすものとして原理的に解明する研究は、いまだほとんど行われていない。また、神信仰と仏法は、近世まで習合という形で存続してきたにもかかわらず、近現代の倫理学・倫理思想史研究において、習合についてはほとんどとりあげられていない。

神仏習合について、従来研究が蓄積されてきたのは、主として歴史学や民俗学の分野においてである。辻善之助における歴史的図式の提示を嚆矢として、堀一郎、田村圓澄、高取正男らの研究が続き、“共存”“弁別・緊張”両面から神仏関係の考察がなされた。その後の研究は、“共存しつつも相互排除の緊張を孕んだ関係”という基本図式の枠内にとどまったが、近年、中村生雄、山本ひろ子、佐藤弘夫らにより中世思想研究が進展し、改めて神仏関係の複雑さとそれを捉える一貫した理論の欠如が自覚されるに至っている。

倫理学・倫理思想史の分野における数少ない研究は、和辻哲郎が日本の神々の究極に「神聖なる無」を見、それを仏教の「絶対空」と重ねるという独自の“習合”理論を構築したことに始まる。和辻には、しかし、神仏習合思想全般に関する論考はない。湯浅泰雄は、深層心理学理論を援用して神仏習合思想を研究したが、倫理学的原理の探究とは言い難い。相良亨は日本倫理思想の根源と諸超越観念を説明する「おのずから形而上学」という原理を提示したが、神・仏観念それぞれをめぐる原理的考察は看過されている。近年、佐藤正英は、事物事象そのものを〈もの〉神、それと関係しようとする意識の根源的志向性を〈たま〉神として捉え返し、伝統的な神・仏観念を、自己の現存への問いに関わる倫理思想史的基礎範疇として提示した。神・仏観念をめぐる原理的探究はようやく端緒を開かれた段階にある。

本研究は、以上の歴史学的、倫理学・倫理思想史的研究成果を踏まえ、神・仏観念をめぐる新たな原理的研究を志すものである。神・仏観念それぞれをその生成にさかのぼって原理的に捉え返すとともに、それら相互の関係構造を解明するための視点を模索する。また、最も早くから神・仏を共存させ、朝廷や武家からの信仰も篤く、民間にも広く普及して神仏習合思想の典型となった八幡信仰を題材として、神・仏観念の相互関係・展開過程について考察する。これら原理的な考察、ならびに八幡信仰を題材とした具体的な考察を通じて、日本倫理思想史における座標軸の解明に資することをめざす。

(2) 本研究着想の動機

平成 20～22 年度、ほぼ同じ研究組織で科学研究費補助金を受け、神・仏関係の原理的研究とともに、八幡信仰に関する研究を行い、『八幡愚童訓』『八幡宇佐宮御託宣集』等を読解した。その際、神・仏関係の解明のためには、それぞれの観念をその生成にまでさかのぼり考察する必要があることが了解された。また、八幡信仰に関する先行研究を読み解くなかで、歴史的研究の成果に比して、縁起・神話・託宣等を題材とした観念にかかわる研究（倫理思想史的研究はこの系統に連なる）は、資料読解も含め、ほとんど手つかずの状況にあることが知れた。八幡信仰は、“大菩薩の託宣”という、それ自体習合的で特異な信仰形態を後世まで持続させてきたことで知られる。生成にまでさかのぼった神・仏観念の原理的考察を絡ませるなら、八幡信仰における神・仏関係を、神・仏という異質の二原理が止揚され、一つの柔軟な原理として生成・展開する過程として新たに記述できるのではないか、との着想を得るに至った。

２．研究の目的

(1) 神・仏観念それぞれについての原理的考察

神話・伝説など、神観念をめぐる諸テクストの読解に基づき、神観念をその生成にさかのぼって倫理学的に捉え返し、記述することをめざす。また、仏教説話集・漢訳経典など、仏観念をめぐる諸テクストの読解に基づき、仏観念をその生成にさかのぼって倫理学的に捉え返し、記述することをめざす。

(2) 神・仏観念の相互関係・展開過程についての具体例に基づく考察

神・仏観念の相互関係・展開過程を示す具体例として八幡信仰をとりあげ、縁起・託宣集といったテクストの読解、および、神仏習合の拠点となった聖地の現地調査に基づき、神・仏二原理が互いに変容しつつ、一つの原理を成し展開する過程について、倫理思想史的に捉え返し、記述することをめざす。

３．研究の方法

(1) 文献読解

『古事記』『風土記』など神観念の生成にかかわる諸テクスト、および『三宝絵』『今昔物語集』など仏観念の生成にかかわる諸テクストを読解し、神・仏観念それぞれについてその生成にさかのぼり原理的に考察する。

また、『八幡宇佐宮御託宣集』『八幡愚童訓』など八幡信仰にかかわるテクストを読解し、神・仏観念の相互関係・展開過程について具体的に考察する。

(2) 現地調査

八幡信仰の発生・展開にかかわる寺社、神仏習合の拠点となった聖地のうち、香椎宮・

筥崎宮をはじめとする九州の寺社（ただし、すでに調査を行った宇佐八幡宮は除く）や石清水八幡宮について、現地調査を行う。

(3) 研究会
　各年度２回、８月および３月に研究会を開催する。研究組織の各構成員が自らの分担する研究について成果を持ち寄り、発表するとともに、全構成員による共同作業として、八幡信仰にかかわるテクストの読解に取り組み、議論を深める。

４．研究成果
　各自の個別研究、および共同研究の成果は、次の通りである。

(1) 研究代表者・柏木は、「仏」観念の生成について、とくに仏にかかわる“物語”に着目して考察することを課題とした。主な題材としては、釈迦仏の一代記、ならびに釈迦菩薩の前生譚という二種類の“物語”をあわせもつ『今昔物語集』天竺部をとりあげた。一代記を構成する諸説話については前年度までに研究を進めていたため、初年度は前生譚群を読解し、数々の菩薩行（『今昔物語集』の場合、その内容は基本的に捨身の布施行である）と成仏後の智慧・慈悲のありようとの論理的連関を考察し、論文として公刊した。
　次年度は、思想史の基礎範疇としての「仏」観念について、その構造を可能な限り全体的に提示すべく、諸論点の抽出・整理を行い、研究会において発表した。主として『今昔物語集』天竺部に拠りつつ、必要に応じて『今昔物語集』成立以前のテクストをも考慮に入れた。一方で仏がかつて菩薩であったころの修行（因）を物語りつつ、他方で生身の仏の諸事蹟（果）を物語る『今昔物語集』天竺部は、さらに、因果の彼方の実在、法身の仏をも想定・示唆しているが、これを表だって展開する説話はない。基礎範疇としての「仏」観念の全容把握のためには、法身仏をめぐる諸論点も、他テクスト（例えば『法華経』）を参照し今後整理する必要のあることが確認された。
　最終年度は、『今昔物語集』天竺部所収諸説話の内容を一覧するための資料「内容構成表」を作成し、研究ノートとして発表した。同様の資料は従来から複数公刊されているが、震旦部・本朝部も含めた全体の概観には便利でも、天竺部 187 話を詳細に読解する助けとしてはやや簡略に過ぎると思われた。そこで、より詳細に内容を一覧できるよう、巻毎に整理した５つの表とそれらの目次としての１つの表、さらに３つの付表を作成した。
　『今昔物語集』天竺部のテクスト読解を踏まえ、倫理思想史の基礎範疇としての「仏」観念をその生成にさかのぼって捉え返し記述するという課題は、研究期間中に完了するには至らなかったが、その見通しを得ることはできた。研究の仕上げ、ならびに成果発表に向けての準備を、今後さらに継続する予定である。

(2) 研究分担者・上原は、初年度には、神仏関係思想が日本人の倫理観の形成にどのように作用しているかを解明すべく、古代から現代に至るまでの葬送儀礼と霊魂観の変遷を整理し直した。結果、原初神道と仏教とが相互に作用し合い、部分的に融合し、それぞれに変容していく構造を明らかにした。その成果を「日本人の霊魂観」の表題で日本医学哲学・倫理学会関東支部例会で口頭発表し、『医学哲学と倫理』第 9 号に論文として公刊した。また、「自力・他力」概念について議論した「第 107 回公共哲学京都フォーラム」（2011.12.5）参加を機に、和辻哲郎や西田幾多郎における仏教思想摂取の在りようを「自力・他力」概念を軸に考察し、近代における「仏」観念の特質を明らかにした。
　次年度は、柏木・吉田がそれぞれ作成した『八幡宇佐宮御託宣集』託宣・示現年表を統合・整理し、表記にかかわる問題点を洗い出し、公表のための準備的検討を連携研究者・佐藤とともに行った。また『古事記』に見られる大物主神話を題材とし、「神」観念の生成と展開について、故郷世界に対する求心的閉鎖性と異郷世界への遠心的関心性という矛盾する志向性の関係から原理的に検討した。そしてその矛盾的志向性が、大神神社や春日大社などの聖地の景観構造に反映していることを明らかにした。また三輪山説話などに見られる原初神道の第一次神話（連携研究者・佐藤）それ自体が、矛盾的志向性の産物であること、および神話における〈景観〉と〈物語〉の相補的関係を形作る原理などを明らかにした。
　最終年度は、昨年度に引き続き『八幡宇佐宮御託宣集』託宣・示現年表を整理し、Web 公開に向けて準備した。また仏・神観念の相互作用的展開に関して、浄土信仰の歴史をインド大乗仏教から鎌倉時代の一遍まで辿り直し、本来は「法」（諸法実相・真如）を知るために自発的・知的であるはずの方法（仏教的原理）が、受動的・情念的に「神」と融和しようとする神信仰的原理を積極的に取り入れることによって、二つの原理を止揚した神仏融和的原理が成立していく過程を確認した。これに類似したプロセスは既にインド仏教の大乗仏教の成立と展開においても見られたが、日本での独自の展開を確認できた（その止揚原理は、端的に、一遍の踊り念仏に見いだせる）。

(3) 研究分担者・吉田は、初年度は、『八幡宇佐宮御託宣集』の基礎的研究のための託宣・示現年表を作成するとともに、神仏習合を論じるための方法論的練磨を行った。具体

的には、仏教的要素を排除して行われた和辻哲郎の近世芸能論を、古代・中世の仏教モデルをも含めた通時的な観点から批判し、神仏習合の宝庫としての近世芸能を神仏習合論の研究素材として取り戻すことを提言した。また、和辻を継いだ相良亨以来の倫理学・日本倫理思想史における方法論的反省を行った。

次年度は、『八幡宇佐宮御託宣集』に基づく託宣・示現年表を整備するとともに、神仏習合を論じる方法論確立のために和辻哲郎の仏教排除的、宗派主義的な近世芸能論を批判し、説経『刈萱』を中心に考察し論文発表した。神仏習合の要素が色濃い説経『刈萱』の典拠元となっている謡曲『苅萱』では、母御という死者の存在が最重要の要素となり、この死者を共有することによって成り立つ真の共同性が描かれていることを明らかにした。謡曲の苅萱父子が出家者としての共同性をもち得たのは、実は死者としての母御を共に弔うことによってであり、説経『刈萱』もこの死者の共有という核を受け継いで展開されたものと位置づけた。

また、八幡神の存立基盤とみられる霊魂について考察を深め、『源氏物語』の六条御息所の場合について論文発表した。

最終年度は、『八幡宇佐宮御託宣集』託宣・示現年表の修正を行うとともに、八幡神の存立基盤とみられる霊魂について古代から近代初期に至る新たな思想史図式を導出し、講演及び論文発表した。具体的には、原始時代からの死後霊魂観が、古代において、神道的に特化した形として、霊魂が祭祀者天照大御神のみに極少化・最尊貴化されたこと（『古事記』）、またそれと対照的に仏教的に特化した形として、全ての存在の死後霊魂が主題化されるに至り（『日本霊異記』）、以後、死後霊魂とは仏教が扱うべきものと感じられるまでになったことを明らかにした。その後の展開として、近世の武士道・儒学・国学が仏教的死生観・霊魂観を捉え直そうとした、という思想史図式を提示した。

また、日本人の霊魂観についての定説とされる柳田國男説を批判的に読み解き、乗り越えの方向性を示した（近刊）。

(4) 研究分担者・栗原は、初年度のみ、連携研究者として研究に参加した。定例の研究会において豊澤一『近世日本思想の基本型』の書評を担当し、著者当人とも議論を行った。氏は、本研究の足がかりとなった平成 20～22 年度「神・仏観念の共存と相互排除をめぐる倫理思想史的研究」の研究分担者であり、当該著書はその成果として、戦国期～近世中期における「天」観念の内実を、神・仏共存的な世界観との関係を踏まえ考察したものである。その要点は、天命・運命（定め）として降される「天」の超越性が、武士・儒学者などの道徳的規範・営為（当為）をいかに支え導いたか、という問いにあった。書評は、翌年論文一本として発表された。

次年度は、前述した豊澤氏の課題を継承し、また広く古代以来の神・仏観念と「天」観念との相互連関にも改めて着目すべく、近世の恋愛文学において志向された超越観念の内実と、そうした志向と儒学的道徳規範との相克を、研究課題として設定した。取り組みの端緒として、近松の心中物・西鶴の好色物と、『源氏物語』とを、倫理思想史的観点から比較考察した。両者の接点を、主人公の情死への衝動と仏による救済への願望に見ることで、古代から近世にいたる「仏」観念の変容の一端を明らかにするとともに、情死と神婚の関係解明に向かう契機をも得た。同時に、心中物・好色物における恋愛衝動と、儒学的道徳との相克的連関についても再確認された。以上の研究を論文一本として発表した。

最終年度は、前年度に発表した、近世町人文学に表現された情死の衝動と神・仏観念との連関をめぐる考察を踏まえ、同時代に日常的な人倫秩序の根拠を問うた、儒学者による反仏教的言説の一例として、伊藤仁斎『童子問』の思想を概括し、共著において発表した。神・仏観念と不可分な恋への衝迫を描いた町人文学と、「天」観念を拠りどころとする愛の道徳説が、近世前期の上方という同一の土壌に生まれたことは、両者が対抗的であるというよりむしろ相補的であり、さらには共通の人間観・世界観に根ざしたものであることを示唆する。ここに近世的「天」を、その前提である神・仏観念からの展開として捉える端緒を、得ることが出来た。

(5) 連携研究者・佐藤は、2003 年に刊行した『日本倫理思想史』（東京大学出版会）を大幅に増補改訂し、『日本倫理思想史　増補改訂版』（2012 年）を刊行した。これにより、近現代の倫理思想史の記述が充実することとなった。また、その執筆と平行して、倫理学原論としての『現存の倫理学』の執筆を始めた。これは和辻の『倫理学』（1949）以来の、日本倫理思想史を踏まえた倫理学の体系的著作として位置づけられる。本研究の課題との関係では、神・仏観念の生成と展開を存在論的に明らかにした点が画期的であり、今後、神・仏観念の展開と相互関係をより詳細に考察するための原理的な基盤が確立したと言える。草稿段階で、本共同研究の研究会での討議も複数回行い、研究組織の全構成員でその知見を共有し、それぞれの研究に反映させた。執筆は最終年度末にほぼ完成に近づいており、2014 年 9 月に筑摩書房から刊行予定である。また、『茶の本　日本の目覚め　東洋の理想　　岡倉天心コレクション』（筑摩書房、2012 年）の「解説」で、日本倫理思想史の中では忘れられがちな岡倉天心の独創性について、「仏」観念の中世的展開のみならず道教の原理についても触れつつ解説した。

(6) 八幡信仰を題材とした神・仏観念の相互

関係・展開過程をめぐる研究には、研究組織の全構成員が共同で取り組んだ。文献読解、現地調査、および研究会を以下の通り行った。

①文献読解
　八幡神は、日本の神々の中で最も多くの託宣を残した神として知られる。『八幡宇佐宮御託宣集』は八幡神研究の基本文献の一つだが、史的記述のみならず“神話的”記述を多く含み、決して読み易いテクストとは言えない。神・仏観念の相互関係・展開過程を探究する倫理思想史研究においては、“神話的”記述をも排除することなく読み解くことが必須の課題であり、このたびの研究では、課題遂行の一段階として、同書に基づく託宣・示現年表の作成を試みた。
　年表作成にあたっては、八幡神およびその他の神の託宣・示現にかかわる記述を、テクスト全十六巻の巻毎に抽出・整理した。研究組織の構成員が分担して素案を作り、研究会における議論を経て内容的・形式的整備を施し、完成稿はWeb上に公開した。
　年表の作成・整備作業に予定以上の時間がかかったため、年表を踏まえた考察・議論は今後に持ち越されることとなったが、託宣主体の呼称や示現様態、託宣媒介者の種別、また、託宣の主題や背景などについて類型化を行ううえで、本年表は少なからず寄与するところがあるものと期待される。

②現地調査
　初年度は、仲哀天皇・神功皇后・応神天皇という八幡神に関係の深い神々が祀られている、忌宮神社（山口県下関市）およびその飛地境内である満珠島・干珠島の調査を行った。満珠島には漁船をチャーターして降り立ち、鳥居跡、島内の様子、島からの景観などを調査した。ここでは、神功皇后に纏わる岩（島）が予見されるなど、「神」観念の景観的意味を理解することができ、また修験道の修行地であったことも確認できた。また同年には、石清水八幡宮（京都府八幡市）の調査も行った。山頂に神社のある男山の立地条件を、八幡神勧請以前の聖地の景観的な意味として、山中の湧き水や淀川などの水との関係において考察することができた。淀川の対岸にある離宮八幡宮の調査も同時に行った。
　次年度は、筥崎宮・香椎宮・宇美八幡宮・宝満山など、八幡信仰が展開した福岡方面での現地調査を行った。筥崎宮・香椎宮（福岡県福岡市）では、八幡信仰移入以前の聖地の景観構造が明らかになった。特に、志賀島との景観的関係の重要性が理解できた。また、宇美八幡宮（同県糟屋郡宇美町）の調査においては、宇佐からの信仰伝播ルートの一端が考察できた。宝満山および竈門神社（同県太宰府市）の調査においては、遠く離れてはいるが、筥崎宮との景観構造上の連関が見られた。
　以上の2年間にわたる調査から、八幡信仰の発生・展開に関して景観の観点から考察を進めることができただけでなく、「神」観念の生成における景観構造的な意味も考察することができた。

③研究会
　年に２回、研究組織の全構成員が参加して開催した研究会では、『八幡宇佐宮御託宣集』の読解、年表作成をめぐる議論を行うとともに、初年度および次年度においては、現地調査にかかわる諸資料の読解、調査結果の検討をもあわせ行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10　件）
①吉田真樹,「日本思想における霊魂の問題」,『国士舘哲学』, 査読無, 18号, 2014年, 1-25ページ。

②柏木寧子,「〈研究ノート〉『今昔物語集』天竺部にかかわる内容構成表」,『山口大学哲学研究』, 査読無, 21巻, 2014年, 79-90ページ。

③吉田真樹,「近世庶民仏教思想と和辻思想史図式の捉え直し（下Ⅰ）～説経『刈萱』を中心に～」,『思想史研究』, 査読無, 17号, 2013年, 1-10ページ。

④吉田真樹,「六条御息所の生霊化の基底について」,『季刊日本思想史』, 査読有, 80号, 2012年, 51-69ページ。

⑤栗原剛,「『源氏物語』における情死の可能性―近世町人文学からの視座」,『季刊日本思想史』, 査読有, 80号, 2012年, 70-90ページ。

⑥柏木寧子,「『今昔物語集』天竺部における釈迦仏ならびに衆生の理解(4)」,『山口大学哲学研究』, 査読無, 19巻, 2012年, 105-128ページ。
http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C070019000008

⑦上原雅文,「日本人の霊魂観」,『医学哲学と倫理』, 査読無, 第９号（2011年度）, 2012年, 26-31ページ。
http://pe-med.sakura.ne.jp/kanto/?p=279

⑧吉田真樹,「倫理学・日本倫理思想史の観点からみた「日本意識」」,『国際日本学』, 査読無, 9巻, 2012年, 69-78ページ。

⑨栗原剛,「豊澤一著『近世日本思想の基本型　定めと当為』書評」,『山口大学哲学研究』, 査読無, 19巻, 2012年, 59-76ページ。

http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C070019000004

⑩吉田真樹,「近世庶民仏教思想と和辻思想史図式の捉え直し（中）」,『思想史研究』, 査読無, 14 号, 2011 年, 1-9 ページ。

〔学会発表〕（計　６　件）
①吉田真樹,「日本思想における霊魂の問題」, 国士舘大学哲学会講演会, 2013 年 6 月 29 日, 国士舘大学世田谷キャンパス（東京都世田谷区）。

②上原雅文,「古代の神観念と自然景観の構造化」, 神奈川大学人文学会, 2013 年 3 月 4 日, 神奈川大学横浜キャンパス（神奈川県横浜市）。

③上原雅文,「日本人の霊魂観」, 日本医学哲学･倫理学会関東支部第 209 回総合部会例会, 2012 年 2 月 4 日, 東洋大学白山校舎（東京都文京区）。

④吉田真樹,「霊魂のゆくえ」, 全国教育関係神職協議会全国大会, 2011 年 8 月 5 日, 静岡県神社庁（静岡市）。

⑤上原雅文,「日本人の超越観念と倫理―天と神仏を軸に―」, 神奈川大学人文学会（招待講演）, 2011 年 6 月 29 日, 神奈川大学横浜キャンパス（神奈川県横浜市）。

〔図書〕（計　４　件）
①黒住真・阿部泰郎・林淳・西村玲・菅原光・若尾政希・清水正之・片岡龍・ブレット・ウォーカー・福田武史・栗原剛・板東洋介・松田宏一郎, 岩波書店,『岩波講座　日本の思想　第４巻　自然と人為』, 2013 年, 296-305 ページ。

②佐藤正英, 東京大学出版会,『日本倫理思想史　増補改訂版』, 2012 年（初版 2003 年）, 238 ページ。

③岡倉天心・櫻庭信之・斎藤美洲・富原芳彰・岡倉古志郎著／佐藤正英解説, 筑摩書房,『茶の本　日本の目覚め　東洋の理想　岡倉天心コレクション』, 2012 年, 413-426 ページ。

④内藤湖南著／佐藤正英解説, 筑摩書房,『先哲の学問』, 2012 年, 353-367 ページ。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

①吉田真樹・柏木寧子・栗原剛・上原雅文・佐藤正英,「『八幡宇佐宮御託宣集』託宣・示現年表」, 2014 年, 山口大学学術機関リポジトリ YUNOCA にて公開。
http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/2014010119

②吉田真樹,「『日本霊異記』の全体像を捉えようとする思想論的研究書―「凡人」「凡夫」としての自己をテーマに」, 図書新聞第 3157 号, 2014 年 5 月 3 日,（株）図書新聞。

６．研究組織
(1)研究代表者
柏木　寧子（KASHIWAGI, Yasuko）
山口大学・人文学部・教授
研究者番号：００２６３６２４

(2)研究分担者
上原　雅文（UEHARA, Masafumi）
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：３０３３０７２３

吉田　真樹（YOSHIDA, Masaki）
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：２０３８１７３３

栗原　剛（KURIHARA, Go）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：５０４２２３５８
（平成 23 年度連携研究者, 24 年度より研究分担者）

(3)連携研究者
佐藤　正英（SATO, Masahide）
東京大学・文学部・名誉教授
研究者番号：９００８３７０８